

【砂にしみこむ水】

私は農家に生まれました。山形県の庄内地方の最北の地で、田畑それぞれ約1ヘクタールで米や様々な野菜・果物を作る小農家でした。畑は何か所かに点在し、それぞれの畑に行く道は平たんではなくきつい坂道もあったと記憶しています。今のように、畑に井戸や水道の設備はなく、作物にやる水は自宅から何キロか離れた畑まで人の手で運ばなければなりません。リアカーに水が入ったおけを積み、それを姉と2人で畑まで運んだことを覚えています。姉はリアカーの前に体を入れて引き、私は後から押す役目でした。記憶に残っているほどですからかなり辛い仕事だったのでしょう。私は姉に「まだ?」「まだ?」(畑に着かないの?)と何度も聞くのでした。そのとき姉が私に返した言葉は「もう少しだ」「もう少しだからがんばれ」でした。本当にもう少しだったかと言えばそうではなかったと思うのですが、そのように言われた言葉は今でも自分の心に残っていて、例えば、山歩きをしているときに疲れると自分に「もう少しだぞ」「もう少しだからがんばれ」と声をかけるようになりました。

さて、目的地である畑に到着すると、からからに乾いている作物にその水をやります。ひしゃくで汲んで根のまわりに少しずつ、無駄にすることは許されません。ひしゃくから落ちる水が砂にあつという間にすいこまれていく様子が目に焼き付いています。そんなふうには作物を育てていた頃があったのです。それから何年後かに、その畑にも散水装置が取り付けられました。みんなが楽になったことは大きな喜びでした。でも、私はそのときにリアカーで水を運んだ経験ができたことに感謝しています。父と母の働く姿を見ながら過ごした18歳までの時間が本当の宝物だと思えます。

【朝の駅で】

先日、神奈川・関東(東京を除く)の私立小学校の校長が集まって研修・情報交換を行いました。これは毎年4~5回行っているものですが、今回は、先日の事件があったこともあり、登下校の安全について各校でどのような取り組みをしているかが話題の中心となりました。小学校という小さな組織で教員数も少なく、できることには限りがありますが、各校知恵を出し合って継続可能な取り組みをしていることが分かりました。

桐光学園小学校では、これまでスクールバス各便の教員が発車時刻前に乗車場に行き子どもたちを見守るという方法をとっていましたが、今は、教頭と校長が交替で担当の教員に加わる形で駅での見守りを行っています。

朝駅に到着する子どもたちは、一日の中で最も「いい顔」をしています。それは、学校に行くのが楽しみな子どもたちが友だちに会う時だからでしょう。私もそんな子どもたちの気持ちのやりとりの中に身を置くことができることをとても嬉しく思っています。そして、毎日のその時間は、あつという間に過ぎてしまいます。また、子どもたちと挨拶を交わしながら少しの会話を楽しむことができる時間でもあります。

また、保護者の方々にも、子どもたちの見守りに参加していただいております。「短い時間ですが、お役に立てれば」とおっしゃっていただいたことがありました。本当にありがとうございます。

【「自分がされていやなことはしない」という言い方は】

私たちがよく子どもたちに言うことの中に、「自分がされていやなことは人にしないように!」があります。私は何度もそういうことを子どもたちに言ってきましたし、先生方や保護者の皆さんもそうではないかと思えます。しかし、これはあまり子どもたちに伝わらないように感じるが多くなりました。

なぜかという、人がいやがる(迷惑になる)ことを繰り返してしまう子が多いこと、気に入らないことがあると乱暴なことをすることで自分の気持ちを表現してしまう子がいることがとても気になるからです。そしてそのような子の中には、「ぼくは(わたしは)そういうことをされても平気だ」と言う子までいるのですが、本当にそう思っているのではないはずです。私たちの話し方、伝え方がよくないことも原因の一つとしてあるのでしょうか、これは何とかしなければならぬことです。「いじめ」が繰り返されることにもつながることです。

子どもたちはまだ多くのことを経験してきているわけではありません。自分がされたことがないことを想像してそれがいやなことであるというところまで結びつけることは難しいことだと思いますが、全て経験したことを元にしたと考えることができないとしたら、それは大変なことになってしまいます。大切なことは、毎日の生活において、自分のまわりで起きる様々なことがらについて、見て、考えて、自分なりの考えを持つということを習慣としていくことではないでしょうか。そうすることで、物事に対するそのときそのときの自分の思いをしっかりと持つことができ、少なくとも自分がどちらに側にあるべきなのかを決定することができるようになり、「いやな思いをしている」「つらい思いをしている」「悲しんでいる」ような子がいたら、しっかりと相手に寄り添うことができるようになることと思います。学校では、子どもたちにそういう「思いやり」の力を身につけさせていかなければならないと強く感じるこの頃です。